

BSIS 見聞録：学生が一番受けたい授業を参観して

武 田 修 一

[要旨] 2007 年度 BSIS の引率者として参加し、代々の BSIS 参加学生による授業評価が極めて高い Dr. Sarah Pruett の授業を参観し、その魅力を探った。計 3 回の参観では全貌を観察できたわけではないが、種々学べたことが多くあったので、今後の参考のために観察記録を認めた。

同時に参加学生が BSIS の目的を達成するために、国際交流センターが考案した注意事項がどれほど守られていたかを報告し、今後参加学生に課せられる課題についても考察した。

はじめに

BSIS とは Bunkyo Summer Intensive Study in U.S.A. の略で、1980 年（昭和 55 年）に Ambassador College (Pasadena, California) の協力のもと、同校を実施校として文京女子短期大学・英語英文学科の記念すべき第 1 回海外英語研修がスタートした。

1989 年 12 月、Ambassador College がキャンパスをテキサス州へ移転することを決定したことに伴い、同校との提携関係を解消し、1990 年度から提携校を St. John's University (Collegeville, Minnesota) に変更し、現在に至っている。

私は第 1 回の BSIS に、BSIS の生みの親である宇都教授（団長）と共に 58 名の学生を引率した。その後第 2 回、第 4 回、と計 3 回引率者として Ambassador College を訪れた。

文京学院大学・短大における教員生活の最終年となる 2007 年度に、縁あって BSIS の引率者を仰せつかったことは、第 1 回目に参加しただけに感慨深いものがあった。

BSIS がスタートして 29 年目を迎えた 2007 年に参加して、このプログラムがいろいろな面で改良が加えられ成熟していることを実感した。

引率者のマニュアルもよく整備され、今回の引率にも常に携帯し大いに役立った。年々新しい情報を加えつつ改良を続け、引率者のマニュアルを作成される国際交流センターのご努力に深謝する次第である。

さて、今回 BSIS に 25 年ぶりに参加して、授業参観やイベント参加を通して本学における短期語学研修の有効性を概観してみたい。

BSIS の目的

Bunkyo Summer Intensive Study in U.S.A. は表題の通り、3週間のアメリカ滞在の中で、英語の学習を中心に、アメリカ文化を集中的に学ぶプログラムである。現地学生と生活を共にすることにより、互いの生活習慣、文化を理解し、国際親善の精神とグローバルな視野を持つことを目標にしている。

毎回 BSIS に参加する学生対象に国際交流センターで事前教育を数回実施している。その際参加登録学生に手渡している手引書には、BSIS の目的を達成するための24項目にわたる基本的注意事項が明記されている。

今回3週間の研修期間を通し文京学生と現地での生活を共にした観点から、当該注意事項がどのように守られていたかを概観し今後の参考になればと願うものである。

そして代々の BSIS 参加学生から高い授業評価を受けていらっしゃる Dr.Sarah Pruett の授業を参観させていただき学んだことを反芻してみた。

なお、今回の参加学生は総計17名で、内訳は外国語学部生：3年生4名、2年生3名、1年生3名、短期大学生：1年生7名であった。

BSIS の基本的注意事項：目的を達成するために基本注意事項24がいかに守られたか

1. 文京学院大学生・文京学院短期大学生としての誇りと品位を保ち、国際人としての最低マナーは守ること。

参加学生は現地の生活に速やかに溶け込み、のびのびと臆することなく文京学生の品位を保ちながらミネソタでのキャンパスライフを楽しみ、マナーも立派であった。研修期間中に、引率者として特別注意しなければならないことも皆無であった。今までの引率経験から推して、参加人数も少数であったことも手伝い、全員が学習に積極的に取り組み、現地の先生方や Student Assistants の評判も良く、世話の焼けない学生たちであったと思う。

2. 滞米生活において習慣の違いによる不便さを感じることもあるかもしれないが、それらが彼らの生活習慣であると理解し順応するよう努力すること。

食文化の違いにより、食が合わずに苦慮する例が、海外研修では見かけるものだが、今回は、食文化を含め習慣の違いから不便さを訴えた学生はいなかった。

時々、ベネット先生から美味しいお米や日本食材の差し入れがあり、参加学生は寮内の炊事施設を使って料理し適度に日本食を楽しんでいた。

3. BSIS 参加の主たる目的は勉強である。ショッピングよりは訪問先の見学、勉強に重点を置

こう。

危惧することは全くなかった。キャンパスの立地条件から単独でキャンパス外で買い物することは不可能なので、日常の必需品はキャンパス内の売店で入手し、勉学に重点を置くことができた。お土産等のショッピングについては、スケジュールに組み込まれている施設見学：モールオブアメリカで十分時間をかけて心行くまでショッピングを楽しめたので学生は満足していたと思う。

4. St.John's Univesity は敬虔なカトリックの大学である。宗教上非難を受けるような行動をしないように気をつけること。

Student Assistants である 3 人：Penyia, Carrie, Bryan は常に文京生と行動を共にしてくれていた。3 人とは殆ど毎日会っていたので、学生の言動等につき時々訊ねたことあったが、常に no problem という返事が返ってきた。したがって宗教上非難を受けるような言動を文京生がとったことはなかったと確信できる。

5. 国際親善活動も度を越して誤解を招くことのないように。彼らとの会話の中でプライバシーに関する事等については深入りしないこと。

Student Assistants の 3 人（以後カウンセラーと呼ぶ）からの情報にも彼らのプライバシーに深入りした文京生についての苦情を聞いたことはなかった。

Dr. Sarah Pruett の授業で、3 人のカウンセラーに質問をしていろいろ情報を聞き出す課題が出ていたが、その場合もあくまでも課題の内容の範囲内での質問であったと推測できる。

6. 健康管理には各自十分注意すること。暴飲暴食、夜更かしを避け、十分睡眠をとろう。

今回の参加学生は健康管理が十分できていて、研修期間中体調を崩した学生は皆無であった。日本を出発する前に保健室から預かっていた薬類も一切使わずに済んだ。虫刺されでマキロンを借りに来た学生が 1 名いただけであった。夜更かしもたまにはあったようだが、授業の予習や課題の提出の準備に追われていたのが現状であった。

7. 体調に異常を感じた場合は、速やかに申し出ること。絶対に無理をしない。

全く心配することはなかった。

8. 参加者は全体としての行動を優先し、個人的行動にはある程度の制約がある事を承知しておくこと。団体生活ではわがままは許されない。

節度ある団体行動がとれていた。ホームステイ先の家族の一員とプロ野球観戦に誘われ参加したい旨の要請が学部 3 年生 1 名からあった。ベネット先生と相談のうえ、帰寮時間の励行を約束させ、個人行動を認めた例が 1 件あった。当日帰寮してすぐ送ってくれた当該米人とその

友人を伴い、引率者の部屋に報告に来た。節度ある個人行動であった。

9. 単独行動は避けること。

キャンパス外の見学先等では、必ずグループで行動するよう再三念を押したが、全員がよく守り安心していられた。特に化粧室を利用するときは必ず2人以上で行くよう指示した。互いに声をかけあって複数人での利用を励行していたようだ。

10. 時間厳守。行動は速やかに。特に集合時間には遅れないように。遅刻が事故の原因になることが多い。

授業に遅刻した学生はいなかったと報告を受けている。イベントや見学時の集合時間も大方守られていて問題はなかった。ショッピングで5分遅れが1グループあった以外は実によく守られていた。

11. 聴く耳を持つ。伝達事項、注意事項等を聞き洩らさないように。いつもメモの用意を忘れない。

伝達事項、注意事項等については、当初は若干聴き洩らしもあった。現地で渡された英文プリント類の読み取りが十分でなく、寮の門が保安午後11時で閉門されるのに気づかず、グループで星を眺めていて遅れ、入室できないことが一回あり、戒めになった。

12. 何か特別のことをする時には、事前の了解を得ること、後の報告を忘れない。自己判断は大怪我のもと。

事前の了解を得ずに、特別のことをしたことはなかった。細かなことについてはほとんどカウンセラーとの相談で処理できたようであった。

13. 交通の仕方が反対であることに注意しよう。

問題はなかった。スクールバスで団体での移動がほとんどで、安全を確認してからの下車・乗車であったので自然と交通ルールは身についていた。

14. アメリカでは公共施設はほとんど禁煙となっている。未成年者及び許可されていない場所での喫煙は厳禁。

参加者のうち、学部3年生の一人が喫煙者であったが、喫煙マナーは良く守られていたので問題はなかった。

15. 飛行機やバスの中はかなり冷えるのでトレーナー等常に身近に用意しておくこと。個人の都合で全体の温度調整はできない。

事前の情報をよく聞き、各自の準備は用意周到であった。スクールバスで移動のとき、小型バスを利用したときのみスペースの関係で、席移動ができない学生が、座席下から温風が上がってきて困ったとの報告を、そのバスを下車した後に受けたことが1度だけあった。

16. 日程にある行事予定時間は途中で変更になることもあるので、友達との時間的な約束は余裕をもってしておくこと。

休日の自由時間の過ごし方で、その前夜まで映画鑑賞に行くか、ボーリングへ行くかで二派のグループに分かれたことがあったが、結局前夜遅くにバスの調達ができないことが分かり中止になったことがあった。このときは情報が行き渡らず多少学生間に戸惑いが生じた。最終的には休日の過ごし方はまちまちになり、キャンパス内でスポーツを楽しむグループと、予習に時間をとるグループ、部屋でリラックスして休養したグループとに分かれた。

17. 盗難、誘惑等には十分気をつけよう。特にキャンパス外では見知らぬ人に声をかけられても相手にしないように。

盗難、誘惑等の被害を受けた学生はいなかった。カウンセラーの学生たちは実によく文京生の行動を把握してくれていたため、キャンパス外での見学中も安心して行動できた。

18. 渡航時は貴重品（パスポート等）をスーツケースには入れずに、手荷物にすること。

SJU 滞在中はキャンパス内の金庫に預けておく。

各自貴重品の管理が行き届いていたが、部屋の鍵を2回も無くした学生がいた。食事する時に必ず必要なカードを紛失した学生も1名いた。いずれもすぐ再発行してもらい不便を感じない迅速な対応をしてもらい恐縮した。そのほか訪問先や体育館に財布を置き忘れひやとしたが、ベネット先生の迅速な対応で無事収拾できた。深謝に堪えない。

パスポートはキャンパス内の金庫に預かってもらい不安なく過ごせた。

19. 現地で面会予定のある者は保護者を通じてあらかじめ面会届けを提出し、面会の許可を得ておくこと。なお、面会は引率者に面会者を紹介の後で行う。面会者との外出は原則として許可しない。

今回は該当者なし。

20. ホテルは公共の場であることを忘れずに。公共心をもって生活しよう。ホテルに入ってから外出は原則として認めない。必要な時には必ず許可を得ること。

ホテルにおける学生たちの行動は節度があり良かった。モールオブアメリカでのショッピングを楽しんだ後、ホテルにはあらかじめ想定した時間内に全員戻り、全員無事戻った報告をカウンセラーからきちんと受け感心した。

3週間後の学生の言動には人間的な成長の跡が見られ、研修の意義を実感した。

21. できるだけ家に手紙やメールなどで、近況報告をしよう。学長や諸先生方へも忘れずに。ほとんど全員が、手紙、メール、電話で家庭に近況報告をしていたと思う。ホームステイ終了後、ホストファミリーへ必ずサンキューレターを書くよう指示したが、全員が差出時間のずれはあったものの実行してくれた。

学長と諏訪さんへは大学3年生が皆を代表して手紙を書いていた。

22. ホームステイに関する注意は、出発前にハンドブックを参考にして行う。

事前のオリエンテーションで準備は良くできていたようだ。オリエンテーションで昨年参加した先輩のアドバイスがとても役に立った。

23. 風俗習慣の違う外国での生活、しかも、3週間に及ぶ団体生活では思いがけないことが起こる。その都度わがままを言わず、すべて貴重な体験と思い、協力し合うことが大切である。

今回は学生の団長を設けず、大学3年生に全員への連絡を依頼したが、3年生が良くまとめてくれて頼りになった。また全員が協力し合いチームワークが良くとれていた。

24. 自分を守ることができるのは自分だけである。日本で生活しているような無防備、無警戒は外国では自己破壊を意味する。しっかり自己防衛をすること。

出発前のオリエンテーションでの国際交流センターの職員による事前教育がしっかりしていたので、自己防衛については各自が自覚し、節度ある振る舞いができていた。全員が基本的な生活習慣も身につけていたと思う。

全員元気で語学研修の成果を上げ無事帰国できたのは、学長先生はじめ、国際交流委員長、ご関係の先生方、国際交流センターの皆様方のBSISを必ず成功させようとの篤き思いとご支援のお陰様と心から感謝申し上げる次第である。

ELS Coordinator : Dr. Sarah Pruett の授業を参観して

今回の引率で一番楽しみにしていたことは、代々のBSIS引率教員からも参加学生からも極めて高い授業評価を得ている、Dr.Sarah Pruett の授業を参観させてもらうことであった。かつて文京学園の軽井沢セミナーハウスで、Dr.Sarah Pruett が短期集中英語研修の講師をご担当された時に、参観させていただく約束をしながら、学内事情で参観できず期を失ってしまったので、これが最後の機会となった。

現地でのBSISオリエンテーションの当日、Dr. Sarah Pruett に授業参観の許可をお願い申し上げたところ即ご快諾いただいた。

授業を参観させていただく際に、授業風景をデジカメに収めたりビデオ撮影の許可も同時に伺ったところ、いつでも自由におとり下さいと寛容な認可をいただいた。

Dr. Sarah Pruett の授業は計 3 回見学させてもらったが、初めから最後まで 3 時間通して参観した授業は、第 6 回目（全 13 回）に当たる 8 月 17 日に行われたものであった。

授業は午前 9 時から始まり 12 時まで続く。途中約 10 分の休憩が入った。

以下授業の流れに沿って授業展開を概観し気づいたことを記してみたい。

授業に対する準備が実に周到になされ、長年にわたり文京生に教えてこられたご経験が随所に生かされていて、その授業展開は実に鮮やかで印象に残った。

授業が始まる前にその都度授業の流れが以下のように黑板に明記され、済んだ項目については番号の左に [レ] が記入され、教員も学生も授業の進行状況が確認できるようにしている。

Today's class

1. Vocabulary warm-up (約 1 分間) 全員起立して
2. Pronouciation (約 10 分間)
3. Listening practice (約 30 分間)
4. Tell me about ... (約 20 分間) 全員起立したままで
(10 minutes Intermission)
5. Introducing people (約 110 分間)

1. Vocabulary warm-up (約 1 分間)

毎時間授業の初めに、主に前回の授業で学んだ基本単語について、瞬時にその意味をゲーム感覚で確認する方法である。

多くの場合はカード（ピクチャーカード）を教室内のテーブルの上に広げ、発音された単語を素早く指で指し示す方法で、単語力の定着度を確認されていたが、参観当日は以下のような身体の部分を表す単語を、Dr.Sarah Pruett が矢継ぎ早に発音するのを聴いて、学生たちが素早く両手または片手や指で、各自の当該部分に触れて示すエクササイズであった。

Dr. Sarah Pruett は以下の単語をアットランダムに発音されていたが、朝の目覚まし体操にもなるように、その発音する順序に工夫を凝らしていたように思えた。

head, hair, forehead, eyelash, eyebrow, neck, face, nose, ear, eye, mouth, lip, cheek

jaw, hand, parm, arm, nail, finger, chest, knee, stomach, leg, hoot, ankle, back, toe

わずか 1 分足らずのエクササイズであったが、頭の体操と体の体操が同時にできるので、学生の脳を英語モードに切り替えるには良い方法と思った。このエクササイズが終わるころには学生の顔が生き生きとしてきた。

2. Pronouciation (約 10 分間)

黑板にはあらかじめ **th** の発音について、以下の表示があり、当日の発音練習は **th** の発音に

重きを置いていることが分かる。

a breath → voiceless **th**

breathe → voiced **th**

学生に配付されたプリントには **th** の発音練習用に次のような語句が載っていた。

the thief, take a breath, a red cloth, a new method, both of you, thick and thin,

a thousand things, thank you, think about it, birthday, theology, theater,

Anthony, Matthew, Arthur, Kathleen, Kenneth, Elizabeth, Keith, Seth, Thursday,

Thanksgiving

上記の練習用の語句は voiceless の **th** に偏ってはいたが、発音練習は良く工夫されていて、それぞれの語句の発音指導については、十分配慮された指導案が用意されていた。

それぞれの単語の発音から始まり、よく使われる collocation を考えた minimum phrases、役に立つ短文表現等を運用しながらの効果的トレーニングであった。

短文表現ではノーマルスピードで repeating が繰り返されていたので、学生はかなり鍛えられ **th** の発音に慣れてきたように思えた。

学生は質・量共に **th** の発音について深く学べ自信が持てたと思う。

3. Listening practice (約 30 分間)

異文化理解に関する内容ある長文を使つての listening training が用意されていた。

長文による listening training は異文化理解に関する長文を CD で聴き、学生達は耳だけを頼りに空所を埋めていく練習であった。皆必死になっていた。

なお、発音ばかりでなく、英単語の理解を深め語彙力を増進させるために以下の単語について、接頭辞や語源の説明があり学生も興味を持って学んでいた。

sarcastic, anthropologist, proxemics, discomfort, norm, dimension, intimate, cue, irritation

下線を施した単語は日本の学生にとってはやや難と感ずる単語である。

discomfort の説明は、学生になじみのある disagree, discount, disrespect から入り、dis の意味が not であることから discomfort が a feeling that is negative, uncomfortable であることを導き出す方法をとられていたので学生は理解できたようであった。

単語を接頭辞や語源からその意味を類推することができることを学べたと思う。

4. Tell me about … (約 20 分間)

Listening practice でかなり学生が疲れてきたような様子を感じたが、Dr. Sarah Pruett はここで全員を起立させ、スクリーンの周りに馬蹄形に集めた。

授業の中だるみをリフレッシュするためにも良い方法である。

スクリーンには次々と、世界の有名人、名所旧跡、世界遺産、発明品、映画の名場面などが映し出され、それについて次のような質問を皮切りに、次々と様々な質問が出され、the

questions and answers は、学生同士であったり、Dr. Sarah Pruett から学生への質問であったり変化に富んでいた。

Who is he (she)? What's this? Who built it? Do you recognise it? What happened to the structure? Where is it? Is this famous? Have you ever been there?

スクリーン上の写真：金閣寺、新幹線、黒沢明、宮崎アニメ、エッフェル塔、万里の頂上、Big Ben, Colosseum, 自由の女神、Mayan Civilization 等

the questions and answers はスピーディーに展開され、よくできた学生には必ず、nice, good, good job, very good, nice conversation, wonderful. beautiful など鼓舞する言葉が浴びせられ授業はどんどん活気づいていった。

Tell me about …では英語の基本表現はもちろんのこと、大学生・短大生が当然知らなくてはならない自国の文化、文化遺産、地理・歴史、名所旧跡、発明品等についての知識がないと、応答にも積極性がなくなる。

この点については後ほど触れてみたい。

5. Introducing people (約 110 分間)

この日の授業のメインになるもので、一番時間をかけて授業が展開された。

人を紹介するときには、主に3つの要素 (First name and Last name, Background, Interests) が最低限必要な情報であるなど、基本となる人物紹介における要諦が簡潔に説明された後に、具体的な practice に入った。

以下の順で practice が進められた。

Short Introduction (informal) → Longer Introduction (informal) → Formal Introduction と順を追って、紹介文を作り上げていく方法が、分かりやすく指導されていた。

Dr. Sarah Pruett ご自身を紹介することをまず例にあげ、3人のカウンセラーと引率教員（武田）の紹介文も作られ、学生の身近にいる人物の紹介文だけに、人物のイメージがすぐ浮かぶので、紹介文も作り易くなり良いアイデアと思った。

以下は、その展開である。

1. Name and Information

Sarah Pruett を紹介する

Dr. Sarah Pruett ご自身のことを、ノーマルスピードで紹介しながら、次の項目を順次パソコンに打ち込まれ、情報を整理してゆく。

口頭ではもっとたくさんの情報を学生に与えていたが、スクリーンに投射された項目は以下の順序であった。

* English teacher

* Works at St. John's University in the U.S.

- * Married
- * Two children
- * Taught English in Japan
- * Has taught many Japanese students in the U.S.

人物の紹介に当たっては、紹介する人のバックグラウンドにより、親しみのこもった紹介の仕方、礼儀正しい紹介の仕方があるので、失礼の無いように、十分気をつける必要があることも説明されていた。

2. Short Introduction(informal)

_____, this is Sarah, my English teacher in Minnesota.

Short Introduction は実にシンプルで、どの学生も自信を持って取り組めるよう配慮されている。

3. Longer Introduction(informal)

_____, let me introduce you to Sarah Pruett, my English teacher in Minnesota. We met in summer of 2007, and she's been teaching Japanese students for a long time. She has ever visited Japan twice.

Informal であればこの程度で十分であると説明されたが、臨機応変の対応も忘れないように注意された。

4. Formal Introduction

I'd like to introduce you to Professor Sarah Pruett from St. John's University and the college of Saint Benedict in Minnesota.

Professor Pruett teaches English, and she has taught students from Bunkyo Gakuin University for about 20 years.

Her special interests are teaching academic English and teaching content-based English, and she enjoys traveling, reading and gardening.

この後、カウンセラーの Panyia, Carrie, Bryan, 引率者(武田)の紹介文作成の練習が、情報収集、informal introduction, formal introduction へと進み、最後はスクリーンに名画の1シーン: 赤毛のアン、タイタニック、となりのトトロ、七人の侍等の人物が映し出され、Tell me about ...との問いに、人物紹介を折込みながら、即応的に当日の授業で学んだことを復習し、最後のまとめで、学生に Practice makes perfect. を実感させて授業が終わった。

授業参観後記

Dr. Sarah Pruett の授業を学生が一番受けたがる理由

これまでに BSIS に参加された教職員の皆様並びに学生たちが必ず絶賛するのが Dr. Sarah Pruett の授業だ。

今回の参加学生も Dr. Sarah Pruett の授業には大変満足している。最近も数人の BSIS 参加学生と会合した際に、改めて Dr. Sarah Pruett の授業について尋ねたところ、ますます評価は高まっている感じを受けた。

Dr. Sarah Pruett の授業を受けて一番印象に残っていることを尋ねると、the questions and answers で学生のどんな返答にも、いつも好意的に捉えてくれて、見当違いの返答をした場合でさえも、何とか正答に近いアイデアが本人に浮かぶように、いろいろヒントを与えてくれるし、何とか応えられれば、惜しみなく褒めてくれるので、勇気とやる気が出るとのことだ。以下に今までに得た情報を包括し Dr. Sarah Pruett の授業が学生に受ける要因を箇条書きで挙げてみた。

- * 凜とした教育信念を持っている
- * 授業展開にメリハリがあり心地よいリズムがある
- * 授業準備が十分になされている
- * 学生の応答に対する対応に心を配り、学生に勇気とやる気を抱かせるよう対応している
- * 学生の集中力の維持に創意工夫がある
- * ESL の coordinator としての長年の経験を生かしきっている
- * 教材に陳腐なものがなく、最新の情報を取り入れた内容ある教材を常に準備している
- * 受講学生からの信頼が信頼を呼び代々の教え子に敬愛されている
- * どの学生にも公平な対応ができています
- * 教具・教材をフル活用し授業を活性化している
- * 学生全員の名前（first name）をすぐ覚える
- * 学生に対する心配りがすばらしい
- * エネルギッシュな教育姿勢が学生を元気づけている
- * 学生の話によく耳を傾けている
- * 学生の様々な反応に即応した授業展開を心がけている
- * 包容力がある
- * 常に学生の可能性を引き出すことに心を砕いている
- * ウイットとユーモアがある

以上に挙げた Dr. Sarah Pruett の人柄や授業に関する高評価な項目は、参観授業中における文京生たちの反応やカフェテリアにおける現地学生と Dr. Sarah Pruett との歓談の様子からも容易に察しが付く内容である。

今後も BSIS の現地でのクラスはぜひ Dr. Sarah Pruett に受け持ってほしいと祈念する次第である。



今後の課題としては、文京生が Dr. Sarah Pruett の熱意あふれる授業に、しっかり応えられる下準備及び事前の学習が十二分にできているかどうかであろう。今回参加してみて参加学生が早い時期に事前学習として、ぜひ学んでおくべき事項を次に挙げてみたい。

1. 日本文化・文化遺産や歴史に関して、常識と思われる基礎知識を身につけておく。そしてそれぞれの事象について少なくともキーワードだけでも英語で言えること。

今回参観授業の中で、金閣寺の写真が映し出され the questions and answers が始まった時、学生たちはすぐに反応ができておらず、一人の学生が応答するまでにやや時間がかかっていたのが気がかりであった。

金閣寺は、観光、学会その他の目的で、京都を訪れる外国人のほとんどが同寺院を訪れ、その美しさに感嘆の声を上げるほどである。

海外研修に出かける学生は、少なくとも日本人の心の故郷である奈良、京都の名所旧跡については常識の範囲でも基礎知識を持っていないとてはならない。

新幹線についても、日本が世界に誇れる 20 世紀の偉大な発明品であるので、1964 年の開通、最速の時速、東京から主要駅までの所要時間、英名である bullet train ぐらいは頭に入れておいた方がよい。

2. 世界遺産について関心を持つ

現地で文京生がいみじくも口にした言葉が、「世界遺産についてもっと関心をもって、調べ

ておけばよかった」であった。

Dr. Sarah Pruett の授業で、1972年にユネスコで採択された「世界の文化遺産及び自然保護に関する条約」のことが話題になったし、Tell me about..でも文化遺産や自然遺産が登場した。

世界遺産については、DVDで安く入手できるし、図書館にも完備されているので、事前にある程度の知識を得ておいたほうがよい。

3. Cool Japan について：日本の魅力について英語で紹介できるとカッコイイ。

「cool Japan」= カッコいいニッポン！というキーワードが世界中で飛びかっていることが最近のニュースが繰り返し伝えている。ファッションやアニメ、建築、音楽、料理など、日本人が当たり前と思ってきた日本の様々な文化が外国人たちに格好いいものとして受け入れられ、流行している。

こうした現象に当の日本人がもっと関心を持って、積極的に英語で紹介できるようにしたいものだ。

J-pop についても、ますます世界の関心が高まっているようなので、音楽には国境も通訳もいらぬほどの影響力があり、外国人学生の関心も高いので、国際交流の話題にはもってこいである。世界が注目する日本のアーティストに関心を持とう。

幸いなことに、cool Japan については、NHK BS hi（水曜日夜 7:00～7:44）、NHK BS1（日曜日午前 0:10～0:54）で毎週放送があるので大いに参考になる。なお、NHK の cool Japan — 外国人が感激したニッポンの魅力— はすでに本になっている。英語と日本語で解説されているのでお勧めの本である。

4. 語彙力を高めよう

BSIS 参加学生の切実な声「単語力がもっとあれば、何とかなる場面が何度もあった」

学生はやはり、「花より単語」だ。ふだんからポキャビルを心がけ、「継続は力なり」の精神で、寸暇を惜しんでは語彙力の強化に励んでほしい。英語の自然食品といわれる、洋書、洋画、洋楽、英語ニュースなどに親しみ、表現力実践の場としてチャットラウンジを大いに利用しよう。

5. 普段の授業こそ自分の英語力を磨く絶好の場である。

忘れてはならないのが文京学院大学・短期大学における日常の授業である。こんなに豊富なカリキュラムを生かさなくては、もったいない。

熱心で経験豊かな教授陣から、多彩な科目から、いくらかでも学べるはずだ。

身近にある恩恵を生かし、真剣に、積極的に学んでこそ自分の未来への道が拓かれることを、学生全員が肝に命じてほしい。各自の可能性は無限であるので！

ホームステイについて

Dr. David Bennetts が厳選してくださったホストファミリーは全部素晴らしく、学生は1泊2日のホームステイを存分に楽しみ、多くのことを学んだ。中でもホスピタリティーの大切さ、有難さを実感しその精神の真髄に触れられたことは何より貴重な体験になったと思う。

一方ならぬ心遣いをいただいたホストファミリーには心から感謝申し上げ、今後も交流を深め、異文化理解に貢献できるよう努力することを誓うものである。

改めて Dr. David Bennetts の BSIS にそそぐご熱意、温かい心遣い、日本及び日本人に対する深い理解に感服する。常に日本について、特に文化や文芸の理解を深める努力が続けられる真摯な姿勢に心打たれる。これほど日本文化を深く愛し、自国の人たちに日本の良さを伝えてくださる方はまれであろう。

文京生が、何を望み何を期待しているか、何に不安を感じているかを敏感に読み取り、即対応して下さる心配りには感謝の言葉も見つからない。

文京生は Dr. David Bennetts がそばにいらっしゃる時はいつもリラックスしていたし、気軽に話しかけ、あたかも父親のような親近感を抱き敬愛していた。

忘れ物や遺失物の件で、学生が不安になり困っていたときには、実に迅速な対応で解決され、学生は慰められ安堵し感謝していた。

おわりに

29年前に始まった、アメリカにおける夏期集中英語研修は年々改良が加えられ、プログラムも良く整備され、あらゆる面で充実してきたと感慨無量である。

今までご引率のご重責を立派に果たされて来られた、代々の引率教員の皆様並びに国際交流センターの皆様のご尽力に心から感謝申し上げる次第である。

特に何回も何回も参加され、現在の成熟した米国における短期集中英語研修のしっかりした礎を築かれ、文京学院ならではの伝統ある海外語学研修プログラムに仕上げられた、野口昭吾名誉教授と国際交流センターの諏訪さんお二方の献身的ご尽力のご功績は筆舌に尽くし難く、こうべを垂れるばかりである。

BSIS は実施したそれぞれの年度に、それぞれの感動があり、成果があり、忘れえぬ思い出があり、ハッピングもあったことだろう。

第1回目はハッピングの連続であったが、参加者と引率者の感動もひとしおであった。先日本郷キャンパスで開催された同窓会に、第1回 BSIS に参加された方が3名いらして、当時のことを皆さんが実に鮮明に記憶されていた。思い出話に花が咲いて当時の感動が蘇った。

思わぬハッピングに遭遇しても皆が協力し合って聡明に乗り越え、参加者が研修の成果を

あげ全員無事帰国できていることにこの海外研修の深い意義を感じる。

海外で学生の引率に携わる身にとって、毎日参加学生の平穩無事を祈る気持ちが一番強く、そんなときに頼りになるのが、学長先生から授かる水天宮のお守り「祈 旅行安全」である。代々の引率者がこのお守りを常に携行して全員の無事帰国を日々祈った。

本年度もお陰様で全員病気もせず、一定の成果をあげ無事帰国できたので、本年度中に水天宮へ御礼参りに参詣する予定である。

あらゆる恩恵を被ってこそ物事が成就することをこれからも忘れないようにしたい。

最後になったが、チームワークよろしく節度ある行動を取り、大変協力的であった参加学生の全員に感謝し筆を擱く。

BSIS の卒業式のときに、感謝のスピーチをした概要を以下に載せ、親身になって文京生をご支援賜った皆様方への感謝の気持ちを新たにしたい。

Ladies and gentlemen,

Thank you very much for coming to celebrate our students' graduation.

We are very happy to meet you again today. This should be a happy day for us, but unfortunately most students don't want to return to Japan. I am at a loss like Hamlet. To return, or not to return-that is the question.

I remember clearly the beautiful day you came to the parking lot in order to meet our students. You welcomed our students with big smiles. At that moment, our students' touch of anxiety about the home stay was shaken off.

According to our students' reports on their experience, you did your best to take care of them as much as possible, every hour, every minute.

Every student was very pleased with your hospitality.

You taught our students a very important and valuable thing ,that is, humanity.

How kind you are! How beautiful you are! How generous you are!

The home stay success was the highlight of our program.

Thank you very much for your devoted support.

We will never forget what you have done for our students.

Now, our three counselors, all of you are excellent and have pride in your work.

Carrie, you are a star and always shine.

Your big smile and rich voice cheered our students. Our students like you and depend on you. Thank you so much.

Bryan, you are a prince and true gentleman.

You are very kind and fair. You supported our students impartially, so you are loved by every student.

Thank you very much.

Panyia, you are the flower of Asian ladies.

You are quiet and have made an effort in the background.

Your modesty is beautiful. Our students love you so much. Thanks a lot.

Dr.Sarah Pruett! You are a great teacher. Our students worship the ground you walk on.

All of our students were greatly touched by your wonderful class. Your eagerness about education, your preparation for your class, your belief, your educational technology, your words of encouragement and so on, everything is perfect.

Encouraged by you, our students threw themselves heart and soul into their studies.

I thank you very much for your enthusiastic teaching.

Last but not least,

Dr. David Bennetts you are the greatest God Father, not Mafia.

God bless you! You are an almighty educator. You can solve difficult problems easily.

Our students are very happy and feel at home with you.

You know Japan inside and out. We respect you so much.

It goes without saying that your contribution to BSIS is remarkable.

You are the builder of the BSIS bridge between Minnesota and Tokyo, no, between America and Japan.

This bridge will never break. Fortunately the bridge is getting stronger and stronger year after year.

Let us use this precious bridge usefully and let us promote cultural and academic exchange between America and Japan.

The greatest Father of BSIS in Minnesota, we do appreciate your contribution.

Finally, thank you very much, your beautiful campus, brilliant student assistants, excellent teachers, beautiful people, pretty angels, great country America of our dreams!